

仕事と心情

Business Work and Personal Mentality

秋田 隆 Takashi AKITA

「男女共同参画の視点を含むメッセージを…」というこの原稿の執筆依頼を頂いたとき、私は、いつも輝く表情をしている女性研究者のことを思い浮かべた。その方は、結婚された当時、家庭（子育て）と仕事（研究）の両立のために、大いなる努力をしてきたことを知っているからである。その方とは若い頃に一緒に仕事をしたこともあり、これまでさまざまな話をしたりしたが、最近ほとんど話をしていない。その方に、当時の苦労話でも聴いてみようと思い、メールした。すると、その日の夜遅くに返信が届いた。返信の内容は、思いがけないものだった。メールには、簡潔な記述ではあったが、仕事上の苦渋が綴られていた。過日たまたまお見かけした際に、にこやかに会釈してくれたこの方の顔を思い浮かべながら、この原稿執筆のためにお会いすることはあきらめた。代わりに、そのうち気候がよくなったら一緒に酒でも飲みましょうと返信しておいた。

男女雇用機会均等法の施行以来、企業でもさまざまな制度改革などがなされてきており、女性が働きやすい環境やシステム作りに取り組んでいる。その結果、現在では女性社員の勤続年数も伸びてきており、女性経営補佐職も増えてきている。しかしながら、システムは変えられても、人の心は簡単には変えられない。制度などとはまた別の次元で、悩みは絶えない。それは、男女の性別の問題を超えたところにある人間本来の悩みのような気がする。

ビジネスがめまぐるしく動き、組織や制度、企業人に与えられる使命や役割もどんどん変わる。けれど、人の心は、石を転がすようには変えられない。研究にしろ事業にしろ、「仕事」をやっていく上での最も大きなライビングフォースは個人の心の中にある情熱であると思う。

戦後間もない食糧難のとき、ある方が、奥様が遠くのお百姓さんの所まで買い出しに行くのを見ていて、これは大変だと思い、廃品同様になっていた発電機用

小型エンジンを奥さんが乗る自転車に取り付けてあげた。それが近所の奥さん達の評判になり、沢山つくるようになったという話をだいぶ以前に聞いたことがある。おそらく、この奥さんへの「想い」が会社を興すきっかけになったのであろう。企業におけるヒット商品開発の背景には、このような人への思いやりが必ずあるように思う。それは、数年前から我が家で毎日活躍している斜めドラム式の洗濯機を家内が満足げにしているのを見ていてもそう思う。おそらく、新型洗濯機の開発段階における女性ならではの視点と発想から生まれた商品なのであろう。

ところで、会社勤務をしていると、どうしても避けられないのが転勤（人事異動）である。配偶者の転勤で難しい選択をせざるをえなかった方も少なくないと思う。私の娘は、小学校の6年間で、4つの小学校に通った。そして、小学5年生の秋に4つめの新しい小学校へ転校したとき、娘は体調に異変を起し、入院した。当初、原因がわからず、病状が良くならないので、医者を変え、3番目の大きな病院で、精神的なストレスが原因であることがやっとわかった。

仕事の都合などで家族が離れた場所で各々生活するというのもよくある話である。私が学生の頃、遠距離恋愛の成就率は距離の2乗に反比例するなど、遠距離恋愛の破綻を迎えたばかりの友人を前にして、仲間同士で冗談を言ったりしたものだ。しかしながら、人間は困難に直面して苦渋の中に生きているときに成長するものであるから、ピンチのときがチャンスするとき。その日々を生きている最中はとても辛いですが、結果として右であれ左であれ、心に響く本当の判断ができるのはこのときであろう。あつき想いで始まる恋愛も仕事も、真に事を成すは困窮のとき。

気持ちだけは若いつもりでいた私も、いつのまにか歳をとってしまった。だが、人間、何歳になっても、自分が燃えることができるものが必須である。燃えると言えば、若い生木よりも、老木のほうがよく燃える。



秋田 隆 Takashi AKITA

三菱レイヨン株式会社
中央技術研究所 研究企画推進室 室長

京都大学大学院工学研究科高分子化学専攻修士課程終了
専門は高分子化学
E-mail: akita_ta@mrc.co.jp